【生活科】教科提案

五感を通して感じ，表現することで気付きの質を高める生活科
～リアルな活動を通して，認識力の土台を育みながら～

１．研究テーマ設定の理由

（１）　学校提案とかかわって

生活科のねらいは，意欲的に取り組む活動や体験を積むことで，「自立への基礎を養う」ことである。では「自立への基礎」とは何なのかを，低学年の発達課題とのかかわりで考えると，幼児期から学童期への移行期であり，およそ次のような発達課題がある。

①言語能力…「話しことば」から「書きことば」への移行。
　　体験したことを言語化することで認識力を養う。
②社会性…自己中心性から集団意識へ。自他の区別。コミュニケーション力。
③認識…社会・自然の認識。時間空間の連続性・系統性の獲得。数量・形の認識。
④感情…相手の反応や，対象との関わりを通した感受性。意欲の形成。
⑤身体能力…手指の巧緻性，調整力（柔軟性，平衡感覚，反射能力など）の形成。

生活科は，子どもの生活の全てを対象とし，発達課題にせまっていく教科である。

①についてはは，感じたことを絵や文字，ことばで表現することで，②については，「友だち」「上級生」など，「身近な人」とかかわる学習を通して，③については，生き物とかかわり，季節を感じる学習で「自然認識の土台作り」を，いろいろなひと，身近な地域，生産活動，仕事（労働）をすること，かけがえのない自分について，昔や世界の学習などを通して，④については，集団で学習すること，子どもにとって魅力ある教材開発をする（対象の選定）ことを通して，⑤については，生活で使う道具，おもちゃなどの工作やあそびを通して，応えていきたい。

本校の「問い続け学び続ける子どもたち」という提案は，生活科においては，「見る・聞く・嗅ぐ・触れる・食べる」といった五感を通した活動によって，ひと・もの・ことへのかかわりを深めることが「問い続ける」活動であり，その過程での気付きや個別的な事実認識が生活科での「学び」であると考えている。

感じ方は子どもによってちがうため，感じたことを一人一人が多様な表現方法を駆使して伝え合う。また自分の気付きを確かめるために，実際に体験を繰り返したり，表現したりすることで追体験し，認識を深めるようにする。このようにそれぞれの気付きを交流し合い，つなぎ合うことで「あ，それもあったな。」と新たな気付きや，「そういう見方もあるのか。」と視点のひろがりを促し，自分の対象へのかかわりを深めていき，認識力を高めていく。

（２）　サブテーマとかかわって

本校の提案サブテーマ「子どもの言葉でつくる授業」にかかわって，生活科における「子ども

の言葉でつくる授業」を考えてみたい。

①生活科における言葉とは

子どもの生活の全てを対象とし，五感で感じ，さまざまな表現方法で表現することで，気付きを深め，認識力を高める生活科においては，文字や話し言葉のみならず，絵，体の動き，身振り，活動の跡が残る成果物等，表現の全てが子どもの言葉である。気付きの反応や，気付きを伝えようとする表現を大切にみとり，授業を組み立てる。

と同時に，子どもの多様な表現から言語化を図り，いわゆる「言葉」数を増やすことで認識力を高めるようにしたい。

②子どもの言葉でつくる生活科の授業

表現の全てが生活科におけるこどもの言葉であるが，表現には２つの側面がある。１つは，気付きや感動を伝えるための表現であり，もう１つは，前段でも述べた通り，気付きを確かめ，認識を深めるための表現である。伝えることをねらいとせず，１人もくもくと同じことを繰り返したり，表現したりして追体験する活動も大切な「問い続け学び続ける」子どもの姿である。

（３）　生活科がめざす子ども像

学習指導要領では生活科の目標を次のように定めている。

「具体的な活動や体験を通して，自分と身近な人々，社会及び自然とのかかわりに関心をもち，自分自身や自分の生活について考えさせるとともに，その過程において生活上必要な習慣や技能を身に付けさせ，自立への基礎を養う。」

ひと・もの・ことという視点から，生活科がめざす子ども像を考えてみたい。

	もの	ひと	こと
めざす子ども像	**①自然にはたらきかけ，個別的な事実認識ができる子** ・自然への興味関心 ・素材のもつ性質への気付き	**①自分を大切にできる子** ・自分自身への関心・自信 ・	**①社会に生きる自分を意識し，社会への関心をもつ子** ・家族への関心 ・自分にできる仕事への意欲 ・生活を支える人への気付き ・異質性への受容
	②工夫してもの作りができる子 ・素材へのかかわり ・素材の特性への気付き	**②友だちを大切にできる子** ・友だちや，身近な人とのかかわり	**②さまざまな表現方法に親しみ，自己表現力を発揮できる子** ・コミュニケーション力 ・直接かかわる体験
	など	など	など

ひと・もの・ことは，それぞれが分離したものではなく，互いにかかわり合っている。

２．生活科における「問い続け，学び続ける子どもたち」
実践事例（２年生「行くぞ！２Ｂたんていだん！」）

「２Ｂたんていだん」として，地域の公園を調査し，表現することで，新たな気付きがあったり，自分の気付きを見つめ直したりすることができ，地域を知ることの楽しさを感じてほしいと思えるように単元を設定した。伝えたいテーマごとにチームで絵や工作，まねっこなどで表現し，伝えた。本時では，公園探検の中間報告を行った。子どもたちは，公園探検を通して，調べた「気」になっていた。そこで，今回の中間報告会で，報告を聞く子たちからのおたずねを通して，「調べが足りない」「もっと調べないと伝えられない」ということに気付いてほしいと考えた。以下，本時でのおたずねの様子である。

～　公園に隣接するお店（F）のチームの報告会　～

はるこ：Ｆは，どんなお店ですか。

あきこ:あとでのひみつです。あとでクイズに出します。

ふゆこ：横についているさしは何ですか。

あきこ：倒れないためです。

なつお：Ｆは，（発表者が描いた絵を指して）そういうお店なんですか。

あきこ：ちがいます。ここととここに空を描いています。ここは時間がなくて描いてません。

その後，お店チームはクイズを行うが，お店の様子が伝わりきれていないものであった。このことより，①教師が適切に出て，「確か」なものを伝える必要性を感じさせることがいる②報告をするための準備段階で，子どもたちが伝えるためのものをみとることの反省が出た。

～　公園で地域の人がしていたスポーツ（ペタンク）のチームの報告会　～

いちろう：(ペタンクの）ボールは持ちましたか。

じろう：持ちました。

はなこ：それで，ボールは何個分の重さでしたか。

じろう：ゴルフボール３，４個分ぐらいの重さです。

Ｔ　：それは，ほんとうなの？

じろう：たぶんです。

以下，この報告会のふり返りシートである。

じろう：たぶん４個分だけど，ほんもののゴルフボールがどれくらいの重さなのか分からないから，５個か４個かわかりません。

さぶろう：ペタンクチームで，てつのボールってほんとうか知りたいです。

たろう：ペタンクのボールのおもさが分からないからさわってみたいです。

このように，表現することで，次の問いをもち，学び続ける姿になるのではないかと考える。

３．研究の展望　　※６つのＲ

①リアルな体験，学習と生活の結合　※real　raw material

子どもによって興味の対象は違う。そこで，１人の言葉から出発したり，身近な現象や素材への興味を引き出したり，みんなの世界をひろげていくような単元構成が必要である。連続性・系統性，つまり子どもが意識の中に「テーマ」をもてるように配慮し，素材・体験ともにほんものに触れられるようにし，学習したことが現実感をともなうようにする。素材そのものにこだわり，素材の本質に迫る活動を多く取り入れる。

②季節を感じる活動（季節の遊び，季節を食べる・栽培・飼育）※real time

現代は「季節感」が感じられにくい。とはいうものの，附属小は自然に恵まれた環境にある。四季の移ろいの美しい日本をよく知るために，附属小の環境も最大限に活用しながら，季節毎の自然の特徴や年中行事，習慣，遊び，店の商品やディスプレイ，人々の装いや食べ物などを経験させる。

③人とかかわる活動　※relation

人は，常に誰かとかかわって生きている。コミュニケーション力のベースになるのは「かかわりたい」「知り合いたい」という前向きな意欲である。子どもの生活を支えるさまざまな人にかかわり，仕事への気付きや，人とかかわることへの意欲を育てる。「こんな人になりたい」「あんなふうになりたい」と憧れを感じたり，世界をひろげるきっかけになったりするような出会いをさせたい。

④表現活動の充実　※representation

活動や体験を通して，学ぶことは多い。表現活動を充実させることで，さらに認識を深め，新たな気付きを促すことができる。また表現を交流し，伝え合う活動により，友だちの考えや気付きに触れ，対象に対する認識はさらに深まる。

⑤異質性を認め合う（世界を知ろう）　※respect

自己中心的なものの見方から，多様性や異質性へ目を向けるとともに，共通性にも気付き，互いに尊び合い，コミュニケーション力の基礎を育むために世界の人々の生活や食べ物，言葉，遊びなどを実際に体験できるようにしたい。

４．研究の評価

リアルな体験を通して，学習と生活を結びつけることができたか。

季節感のある学習活動を通して，季節の移ろいや変化に気付くことができたか。

人とかかわる中で，自分の生活にかかわる多くの人の存在に気付き，自分の生活を見つめる目が豊かになったか。

表現活動を通して，認識力を深めるとともに，友だちと自分の気付きを交流する楽しさを感じることができたか。

自分と相手の違いに気付き，興味をもってかかわることができたか。

生活科 １年Ｃ組	石	上田　恵

１．教材としての石について

科学雑誌「Nature」(2015-04-23)に，ストーニーブルック大学のチームが 330 万年前の石器を発見したと発表した。現在のヒト属出現以前のことになる。日本では大陸から青銅器や鉄器が伝わるまで, 石による道具は縄文時代に制作が始まる土器とともに, 生活用具の中心を担ってきた。

石は，地球をかたちづくるものであり，身近な道具の素材であるといえる。そこで，子どもたちが石とかかわるとき,「自然物」としての視点と,「道具」としての視点で教材化する。「自然物」としては, 石があるのはどんなところか, またどんな石があるかなどに注目するようにし,「道具」としては，石の特徴を考えて使い道を工夫したい。

２．単元設定の理由

（１）　本実践の主張点

小学校指導要領理科では,「石・土」に関する記述は多くない。

「石」そのものについては，第６学年〖理科〗で初めて扱う。

「せいかつ」の教科書には，遊びの一つとして「泥団子」が紹介されている。

本学級の子どもたちは，虫や小動物に興味をもつ子は多いが，泥団子つくりや石での見立て遊びをしている子どもは少ない。石は決して身近な存在ではないといえる。そこで，あえて今，石を教材として子ども達と出合わせ，興味をもってかかわり，たっぷり遊んだり，特徴を考えて何かをつくったりして石の特徴の違いや多様さなどの魅力に気付いてほしい。

石をきっかけに，身の回りに存在するものに関心をもち，かかわろうとする態度を育てたい。

石を探し，石で遊んだり，分けたり，特徴を考慮して使える何かを制作したり，友だちの気付きを共有する活動を通して，石の特徴の違いや多様さに気付くだろう。 それがきっかけとなり，自然に直接働きかけ，自然から直接学ぶ楽しさを感じるであろう。

（２）教科提案とのかかわり

教科提案は,【五感を通して感じ, 表現することで気付きの質を高める生活科　～real な活動を通して，認識力の土台を育みながら～】である。

本実践は, 研究の展望として挙げた５つの柱の「①リアルな体験, 学習と生活の結合　※real, raw material」「④表現活動の充実　※representation」を提案するものである。

生活科は, 子ども自身の気付きが大切にされ, 気付きから出発する単元構成をすることが多い。しかし，本学級の生活経験の乏しい子どもたちは，同じ事を同じ手順で繰り返し，めざすイメージや発想が固定化しやすいという面がある。そこで, 今まで注目してこなかった素材に注目させ, 多様な感じ方や表現方法の工夫を促し，思考の飛躍を期待したい。

（３）問い続け学び続ける子どもたちをめざすために

生活科は，子どもの生活の全てが学習対象である。子どもたちは育った環境や性格，興味関心の違いなどから，学習対象への感じ方，かかわり方，興味のもち方が全く違う。だからこそ本物の体験をさせ，五感を通して感じさせたい。教科の系統性に配慮した単元構成により，子どもたちには問題意識がつながるような対象へのかかわりをさせる。感じたことをそれぞれの方法で表

現し，交流する活動を通し，気付きの質を高めるようにする。

子どもの表現というとき，気付きや感動を伝えるための表現，自らの気付きを確かめ，認識を深めるための表現などがある。伝えるための表現だけでなく，１人もくもくと同じことを繰り返したり，表現したりして追体験する活動も大切な「問い続け学び続ける」子どもの姿であるととらえ，多様な表現をうながしたい。

２．単元の目標

◎進んで石に触れ，様々な方法でかかわろうとする。　（生活への関心・意欲・態度）

◎石の特徴である硬さ，色，形，「割れる」「書ける」などに気付く。

（活動や体験についての思考・表現）

◎石の特徴を考えて，遊んだり，つくりたい物をつくったりする。（自分についての気付き）

３．評価規準

関心・意欲・態度	すすんで石にかかわろうとしているか
思考・表現	石の多様な特徴に気付き，確かめようとしているか
環境・自分	石の特徴を考えて遊んだり，何かを作ったりしているか

４．単元計画　（全時間１４時間　　本時１１／１４）

第１次　土の色調べ（３）

・泥水遊びや，土の色調べをする。

第２次　砂遊び（１）

・砂場で砂遊びをしよう。

第３次　石探し（２）

・身の回りの石を探そう。

第４次　もっと石を探して遊ぼう　（５）

・川原などに出かけ，石で遊んだり，お気に入りの石を見つけたりする。

・持ち帰った石を使って，遊んだり，遊びを交流したりする。（本時）

第５次　石を使ってつくろう　（３）

・石を使って役立つ物をつくる。

５．本時について

お気に入りの石で遊んだり，作りたいものを考えたりして，みんなで見つけた「石でできること」をひろげたい。そういった活動を通して，「書ける」「割れる」「火花が飛ぶ」や，硬さ，色，形，模様，肌触りなどの違いといった石の特徴に気付き，特徴を考えて分けたり，目的に合った素材選びをしたり，ものづくりに取り組んだりできるような視点を育て，石好きな子どもになってほしい。

参考文献　『小学校学習指導要領解説　生活科編』　文部科学省　　『小学校学習指導要領』　文部科学省
『シリーズ・自然だいすき』　地学団体研究会編　大月書店
『かわらの小石の図鑑』　千葉とき子・斎藤靖二著　東海大学出版会
『たくさんのふしぎ傑作集　土の色ってどんな色？』　栗田宏一著　福音館書店

生活科 ２年Ｂ組	あったかい！あんしん！自分の町	横瀬　文子

１. 単元について

本単元は，学習指導要領内容（１）（３）に基づいている。子どもたちに聞くと「あったかい」の中身は「やさしい」「きもちいい」「うれしい」などと答えた。本学級では，帰りの会で「あったかコーナー」という時間を設け，クラス内の「あったかい」と思うことを毎日交流している。そこで，「あったかい」ことを町に探しに行くことから活動が始まる。「あったかみつけ」の町たんけんを通して，「安心」や「安全」に気付き，活動をする。町をたんけんする中で「きしゅうくんの家（子ども 110 番）」を見つけ，そこに住む人にインタビューをしたり，警察署に話を聞きにいったりするなどの活動を通して，町の「安全」のために力を尽くす人の存在に気付く。

また，本校は，通学区域が広域で，和歌山市全域にわたる。まずは，本校周辺を全員で町たんけんし，そこで気付いた町の「安全」という視点で，自分の住む町（以下，自分の町）を見つめ直させたい。そうすることで，切実感をもった実践になるのではないかと考える。

２．単元設定の理由

（１）本実践の主張点

・本校周辺の町たんけんを通して，「安全」の視点を共有する。
・本校周辺の町たんけんや，自分の町のたんけんを通して，人と関わることが楽しいと感じることができるであろう。
・町たんけん全体を通して，どの町にも自分たちを守ってくれている存在に気付くことができるであろう。

町たんけんを通して，何度も調査を重ねるうちに，町の「安全」について発見したことや感じたことがたくさん生まれるであろう。それを表現することで，伝えることの楽しさを感じたり，認識を深めたりすることができるであろう。また，聞き手を意識して発表を工夫できるよう励ましたい。

（２）教科提案とのかかわり

生活科部では「五感を通して感じ，表現することで気付きの質を高める生活科～リアルな活動を通して，認識力の土台を育みながら～」を教科の目標としている。

研究の展望として５つの柱を挙げている。本実践は，中でも「①リアルな体験，学習と生活の結合※real　raw material」「③人とかかわる活動※relation」「⑤異質性を認め合う※respect」を提案するものである。

生活科の教科目標は「具体的な活動や体験を通して自立への基礎を養う」ことを目指している。本単元で出会う人々や様子から気付き，安全を守っている施設や人々の存在に気付き，自分自身が安全に生活をするためにどうすればよいかを考えさせたい。

（３）問い続け，学び続ける子どもたちをめざすために

本校の「問い続け学び続ける子どもたち」という提案について，生活科においては「見る・聞く・嗅ぐ・触れる・食べる」といった五感を通した活動によって，ひと・もの・ことへのかかわりを深めることが「問い続ける」活動であり，その過程での気付きや個別的な事実認識が生活科での「学び」であると考えている。感じ方は子どもによってちがうため，感じたことを一人一人が表現物を使って伝え合う。また自分の気付きを確かめるために，実際に体験を繰り返したり，表現したりすることで追体験

し，認識を深めるようにする。このようにそれぞれの気付きを交流し合い，つなぎ合うことで「あ，それもあったな。」と新たな気付きや「そういう見方もあるのか。」と視点のひろがりを促し，自分の対象への関わりを深めていき，認識力を高めていく。

子どもたちは，自分と関わりがある人に出会ったり，新たな人に出会ったりすることで，様々なことに気付き，もっと知りたいことが増える。本校周辺で「あったかみつけ」の町たんけんをすると「学校のまわりと自分の町はちがうのかな」「〇〇さんの町には，きしゅうくんの家がたくさんあるのか」「もっと自分の町を知りたいな」と問いをもち，もっと自分の町について学ぶ意欲に繋げていきたい。

３．単元目標

〇楽しく町たんけんを行い，進んで「あったかみつけ」をしようとする。（生活への関心･意欲･態度）
〇安全のために，どんな活動をしているのか，気付いたことを自分なりに表現する。（活動や体験についての思考･表現）
〇自分の町の「安全」に気付き，もっと自分の町を知ろうとする。（身近な環境や自分についての気付き）

４．単元計画（全２５時間　本時　１８／２５　）

第１次　あったかみつけの旅に出発だ（６）

・「あったかい」とは何か考える。
・校内で「あったかみつけ」をし，気付きを交流する。
・学校周辺で「あったかみつけ」をし，気付きを交流する。
※子どもたちが，あったかいの中に，「安全」という視点をもつ。

第２次　自分の町のあったかみつけ（１３）

・自分の町の「あったかみつけ」をする。
・自分の町の「あったかみつけ」の気付きを交流する。
・学校周辺の「きしゅうくんの家」に住む人を予想する。
・「きしゅうくんの家」の人に会いに行く。
・「きしゅうくんの家」の気付きを交流する。
・「きしゅうくん」とはどんなものか予想する。
・「きしゅうくん」に会いに，西警察署へ行く。
・「きしゅうくん」の気付きを交流する。・・・（本時　８／９）
※「きしゅうくんの家」のことが分かることで「安心」につなげる。

第３次　あったかみつけを伝えよう（６）

・
・「あったかみつけ」で気付いたことを伝える準備をする。
・自分たちの調べたことを１年生に発表する。

５．本時について

子ども 110 番の家のキャラクター「きしゅうくん」について，調べたことを交流する。それぞれが，「きしゅうくん」についての気付きを伝わりやすく表現しあうことで，楽しみながら話したり聞いたりする。「きしゅうくん」が親しみやすく，自分たちを見守ったり，安全・安心にしてくれたりするあったかい存在であることに気付くことができる一時間にしたい。